

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

（1）過去5年間の報告状況

疾患名	2015年 (平成27年)	2016年 (平成28年)	2017年 (平成29年)	2018年 (平成30年)	2019年 (令和元年)
インフルエンザ	8,574	9,808	10,178	12,318	10,024
RSウイルス感染症	1,679	1,976	2,044	1,684	1,862
咽頭結膜熱	453	448	718	466	563
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,418	1,347	2,229	1,729	772
感染性胃腸炎	7,411	9,708	6,737	6,511	6,192
水痘	544	300	352	259	262
手足口病	4,191	332	2,041	1,212	2,086
伝染性紅斑	197	343	92	200	666
突発性発しん	862	798	858	848	470
ヘルパンギーナ	428	876	687	817	486
流行性耳下腺炎	179	1,399	817	110	56
急性出血性結膜炎	—	1	1	—	3
流行性角結膜炎	23	30	43	58	117
細菌性髄膜炎	3	2	—	4	3
無菌性髄膜炎	3	3	2	3	7
マイコプラズマ肺炎	43	57	13	26	131
クラミジア肺炎	—	1	—	1	1
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	40	58	12	2	8

(2) 各疾病の報告状況

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

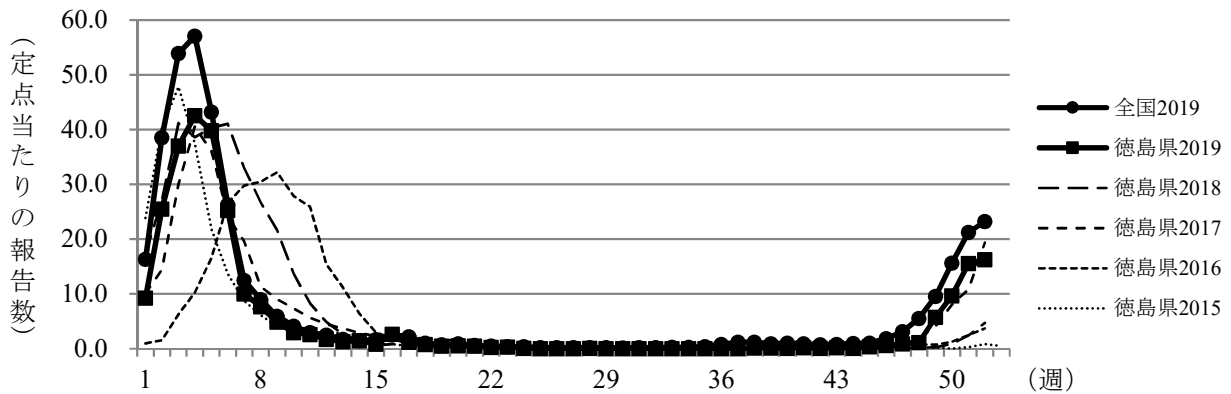
2019年の年間報告数は10,024件であり、前年（12,318件）よりやや減少した。

本年の前期流行は、例年より遅く第2週に流行期入りした後、2週連続で報告数が増加しピーク（42.57件/定点）を迎えた。ピークの高さは前年（41.19件/定点）よりわずかに高かったものの、報告数が注意報レベル（10件/定点）を超えた期間（第2～7週）は、前年（2017年第51週～2018年第10週）と比べ短かった。

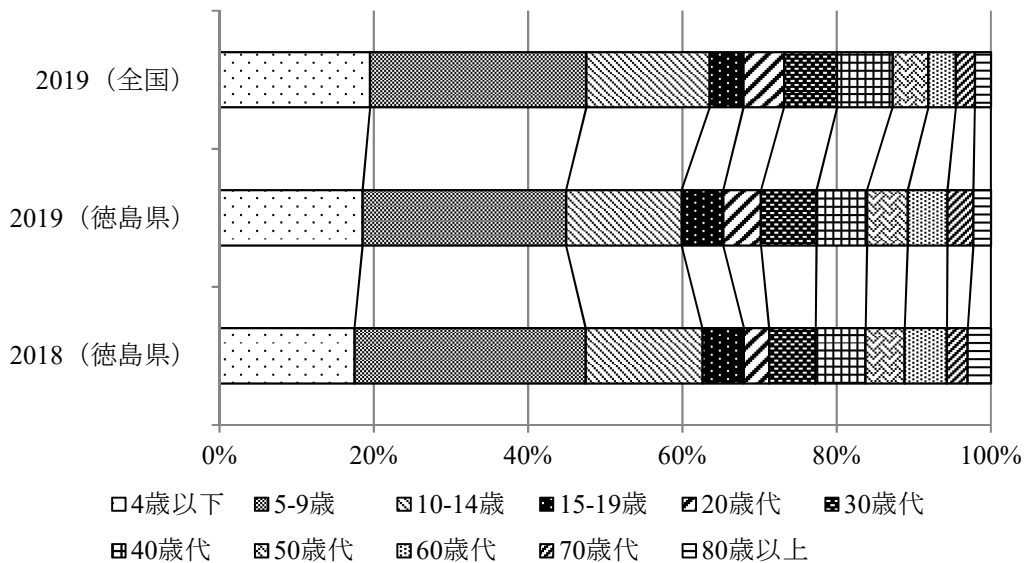
後期流行については、前年より約3週早い第48週に流行開始の目安とされる1.0件/定点を超え、流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下18.55%、5～9歳26.68%、10～14歳14.98%、15～19歳5.30%、20歳以上34.49%であり、前年と比較して20歳以上の割合が高かった。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



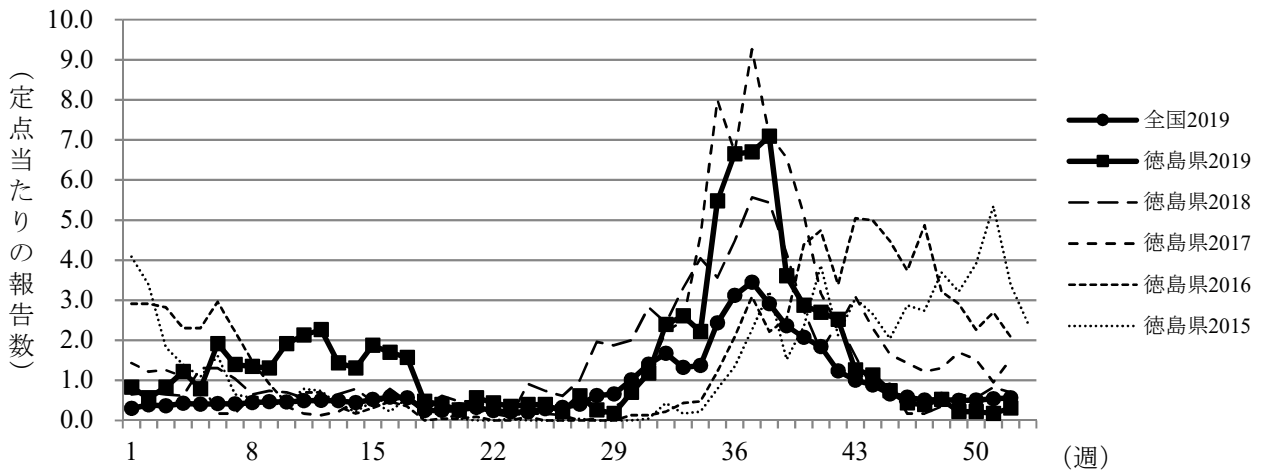
② RS ウイルス感染症

2019年の年間報告数は1,862件であり、前年（1,684件）よりやや増加した。

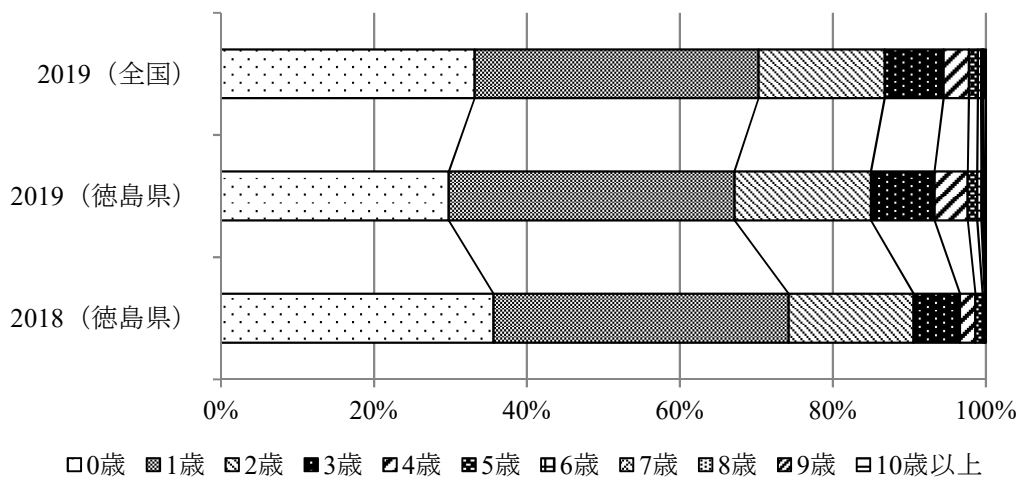
本疾患は、2016年以前は主に秋から冬にかけて流行していたが、2017年以降は7月頃から報告数が増加し、9月初旬にピークを迎え、夏から秋にかけて流行している。本年は第31週頃（7月下旬）より報告数が増加し始め、第35週以後急増しピーク（第38週：7.09件/定点）を示した。以降、報告数は減少したものの流行期間は長く、第45週まで全国平均を上回る報告数が続いた。

本疾患は2歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数でも、0歳29.70%、1歳37.27%、2歳17.88%、3歳8.38%、4歳以上6.77%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半（約85%）を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



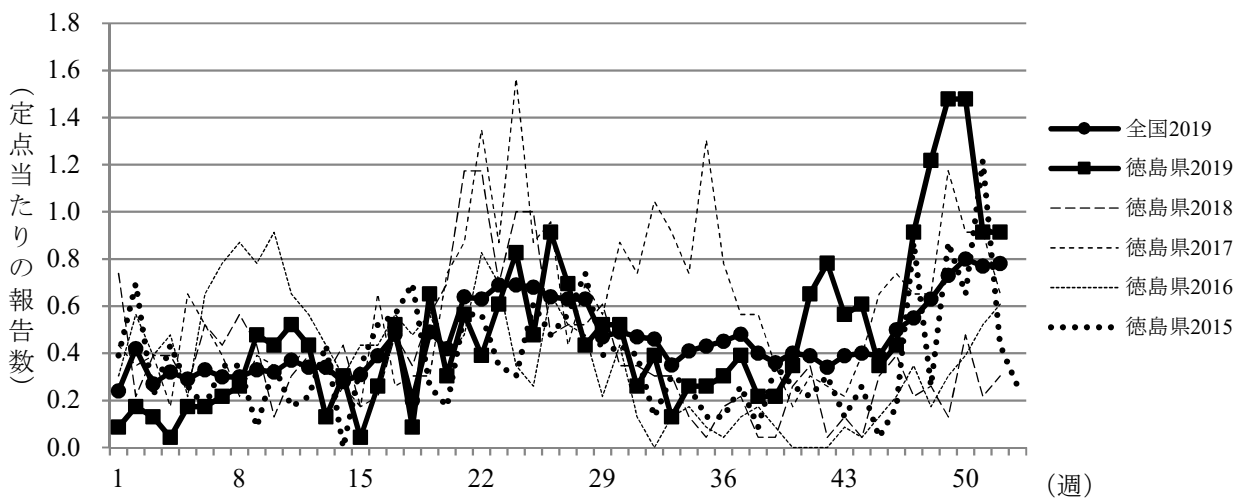
③ 咽頭結膜熱

2019年の年間報告数は563件であり、前年(466件)より増加した。

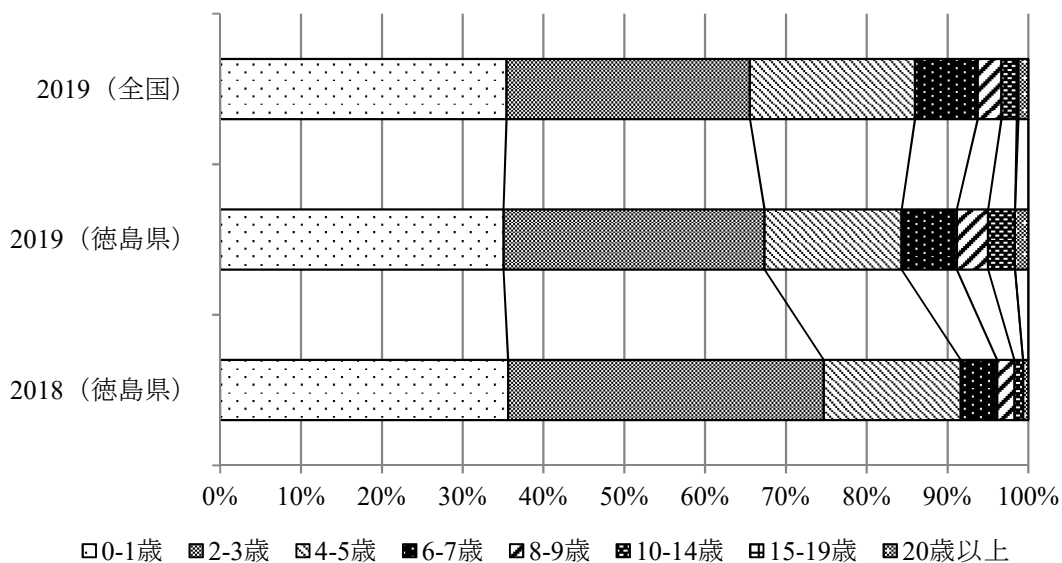
本疾患の流行パターンは、4月ごろから報告数が増加し始め、7～8月にピークを示した後、冬季にも流行のピークが見られる。本年は4月下旬頃より報告数が増加しはじめ、第26週に小さなピーク(0.91件/定点)を示した。以降、やや減少したものの、県内の一部地域での地域流行等により第47週から急増し全国平均を上回る報告数のまま越年した。

本疾患は一般的に4歳以下の乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数も、0～1歳34.28%、2～3歳33.21%、4～5歳17.23%、6～7歳6.57%、8歳以上8.71%であり、5歳以下が約85%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



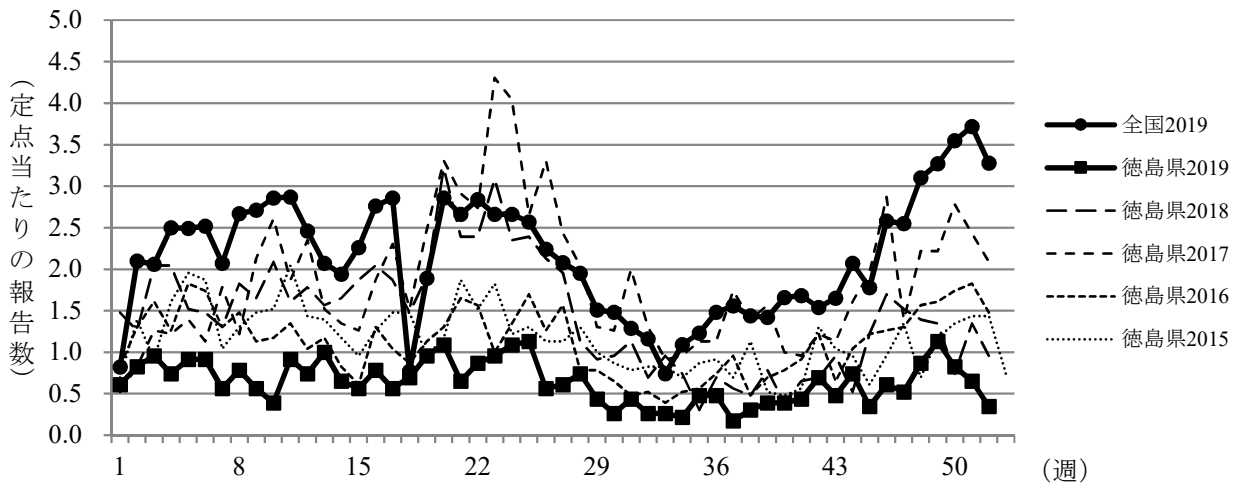
④ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

2019年の年間報告数は772件であり、前年（1,729件）から大きく減少した。

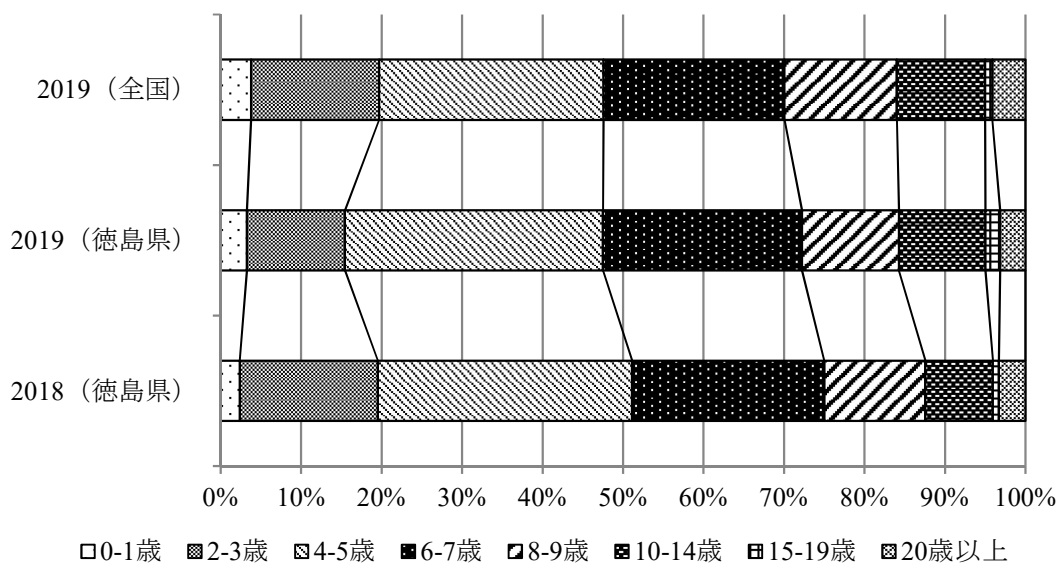
本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、年当初から報告数が少なく、年間を通して目立ったピークも無く報告数の低い状態が続いた。

本疾患は幅広い年齢層から報告されるが、学童期小児からの報告が多いとされる。本年の年齢層別の報告数も、0～1歳3.24%、2～3歳12.44%、4～5歳32.12%、6～7歳24.74%、8～9歳11.92%、10～14歳10.62%、15歳以上4.92%と、学童期小児の割合が高かった。

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



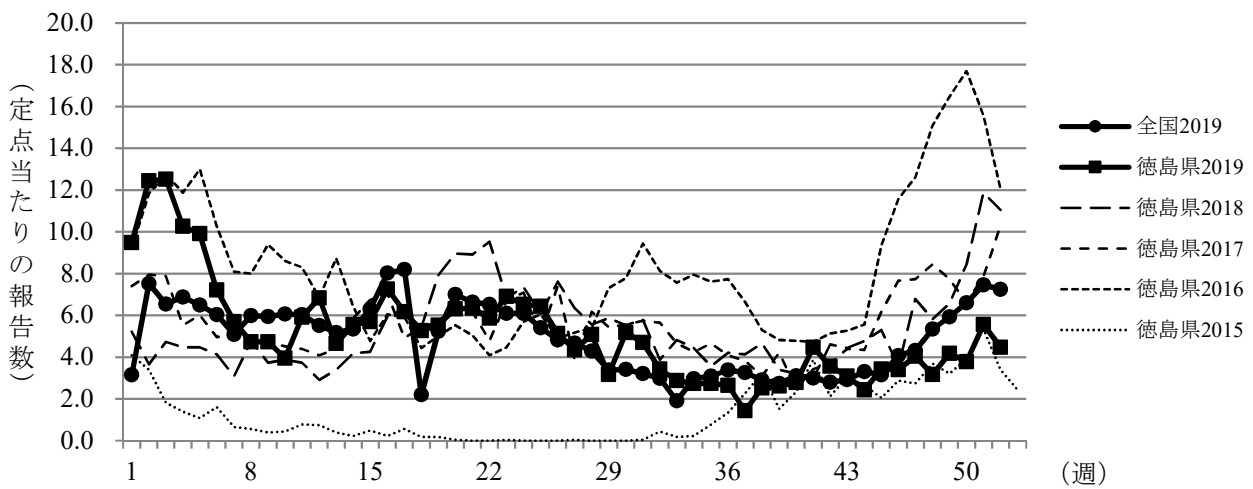
⑤ 感染性胃腸炎

2019年の年間報告数は6,192件であり、前年(6,511件)からわずかに減少し、過去5年で最も少なかった。

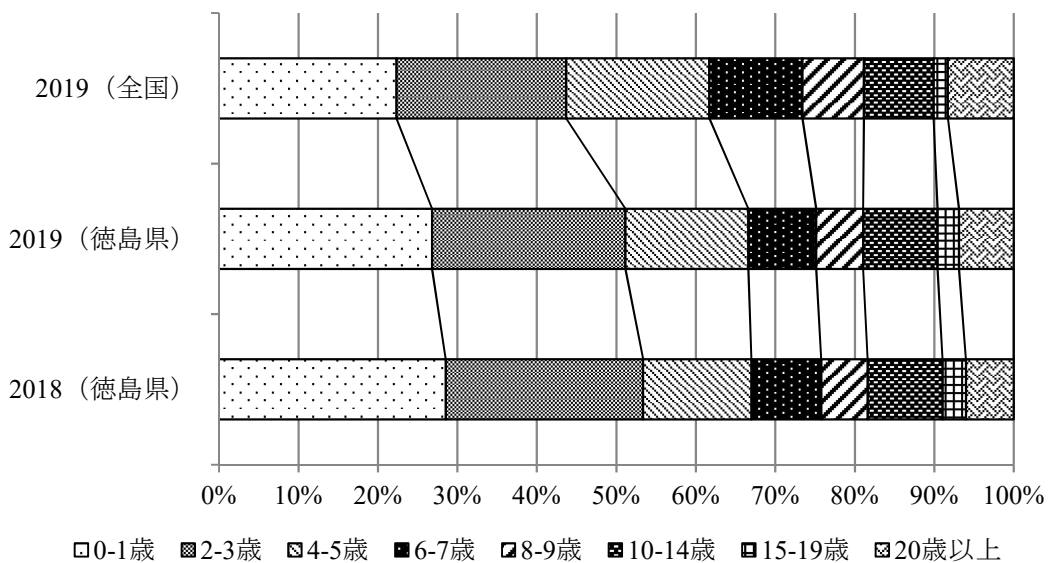
本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つ緩やかなピークを示すことが多い。本年の前期流行は、前年の後期流行に続き第6週頃までは報告数が多かったものの、以降は緩やかに減少した。本年は目立った後期流行はなかった。

年齢層別報告数は、0～1歳 26.70%、2～3歳 24.40%、4～5歳 15.55%、6～7歳 8.53%、8～9歳 5.86%、10～14歳 9.29%、15歳以上 9.67%と5歳以下の乳幼児が全体の約67%を占めた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



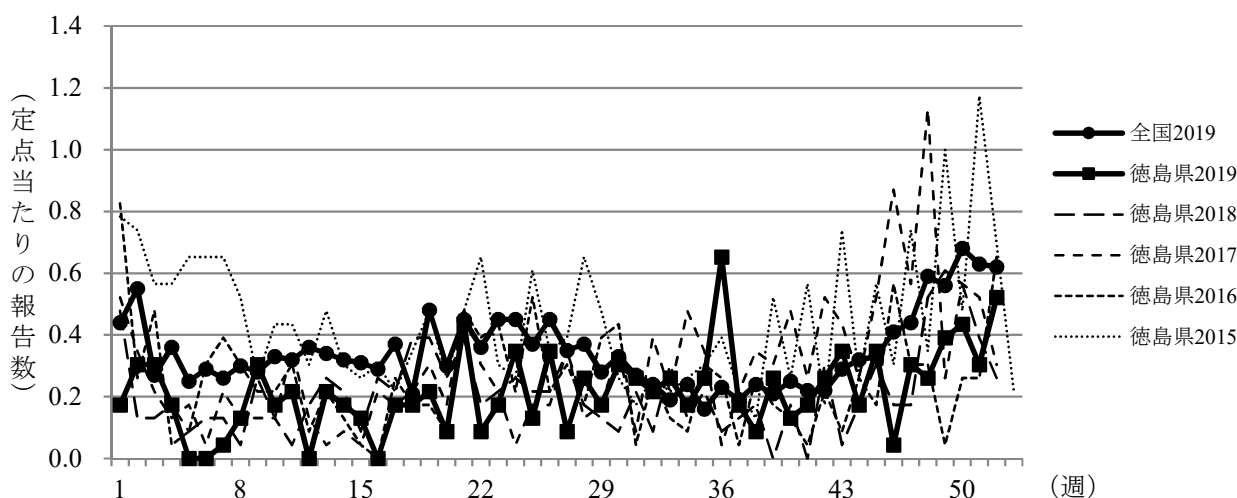
⑥ 水痘

2019年の年間報告数は262件と前年（259件）とほぼ同数報告された。

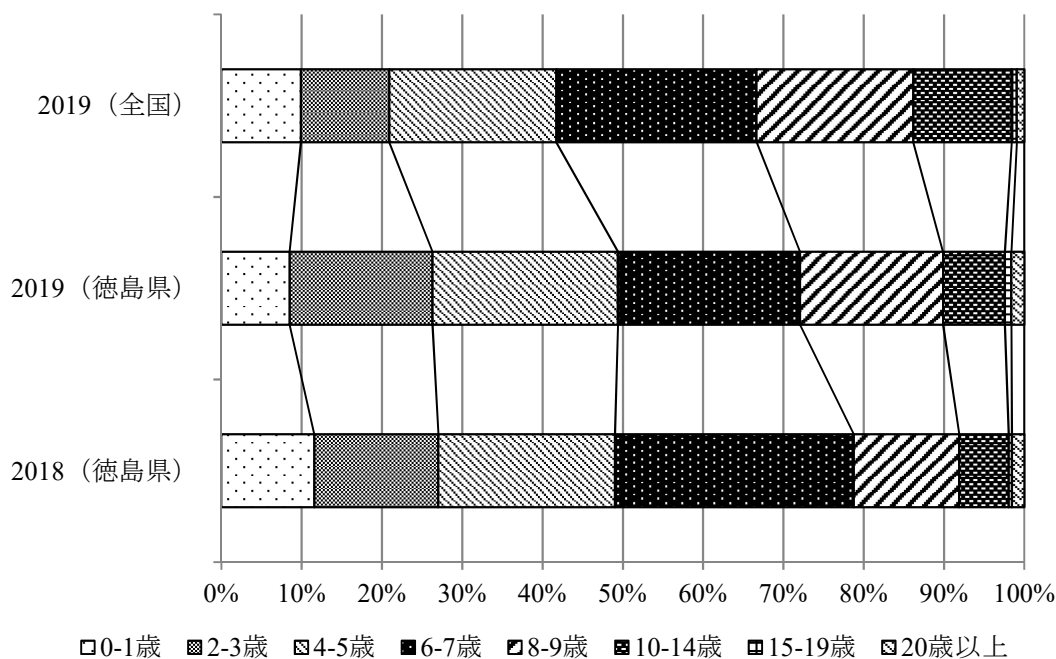
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、9月初旬に県内の一部地域において地域流行などみられたものの、大きなピークは見られず、年間を通じて低い報告数（1.0件／定点以下）のまま推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳 8.02%、2～3歳 17.18%、4～5歳 22.90%、6～7歳 23.66%、8～9歳 17.94%、10歳以上 10.30%と10歳未満の報告が全体の約90%を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



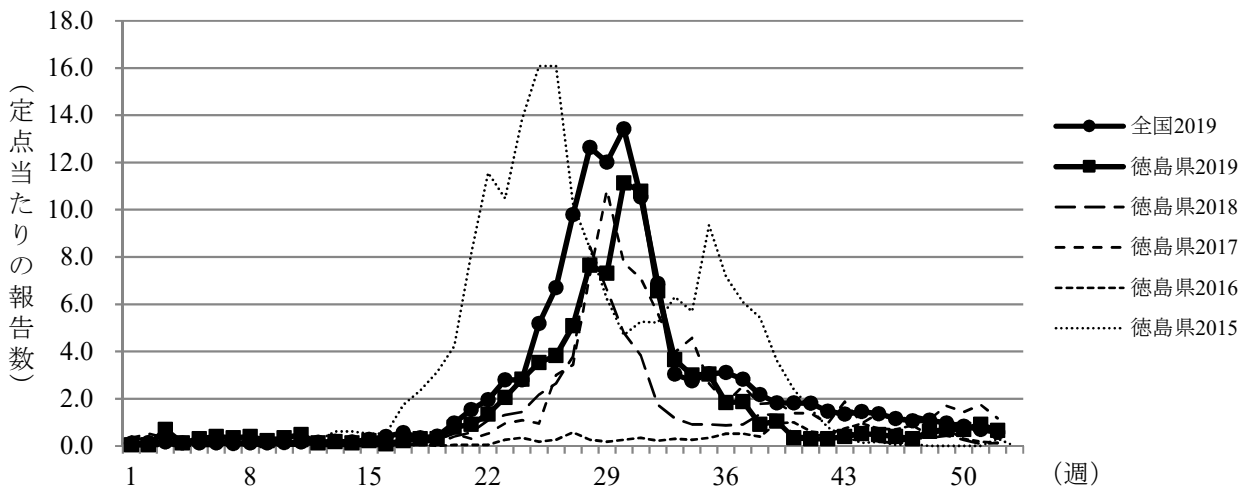
⑦ 手足口病

2019年の年間報告数は2,086件であり、前年(1,212件)より大きく増加した。

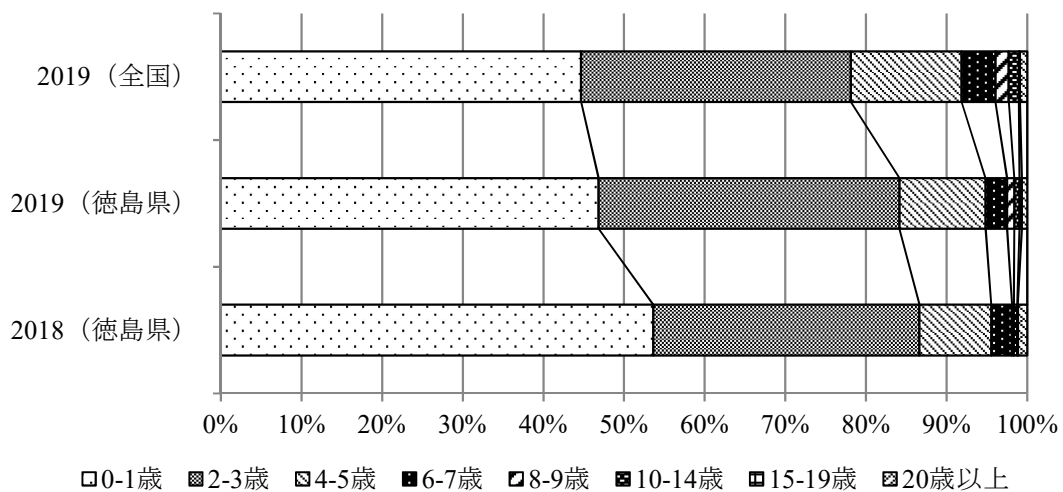
本疾患は1年おきに流行を繰り返しており、全国的に見ても本年は流行年であったといえる。また本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年7～8月にピークを迎える。本年も、5月中旬頃より報告数が増加し始め、第27週頃から急増し、第30週(7月下旬)にピーク(11.13件/定点)が見られた後、急激に減少した。

年齢層別報告数において、例年、5歳以下の乳幼児からの報告が9割を占めており、本年も、0～1歳46.50%、2～3歳37.39%、4～5歳10.79%、6～7歳2.68%、8歳以上2.64%であり、5歳以下からの報告が全体の約95%を占めた。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



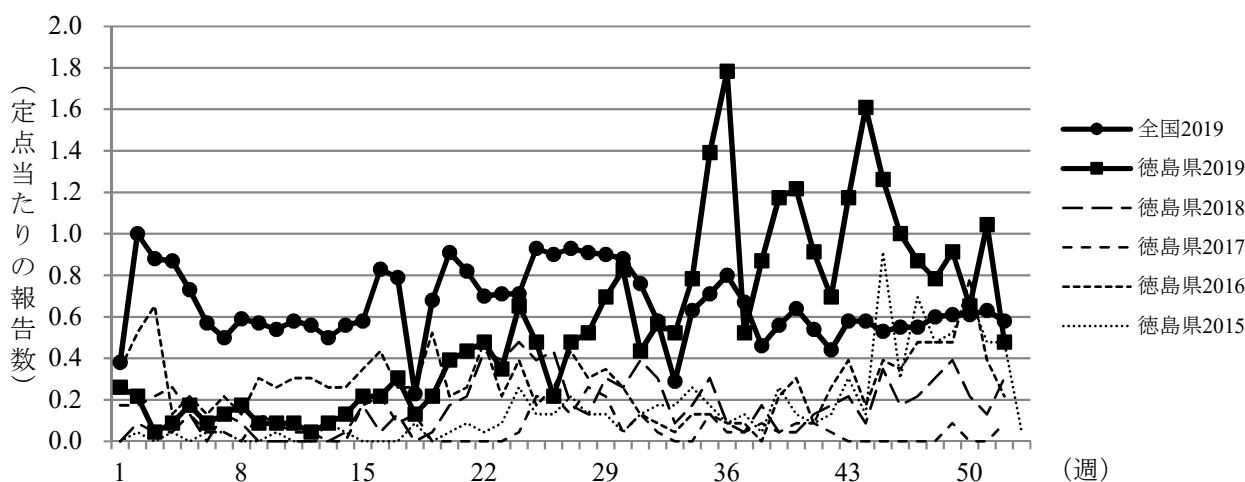
⑧ 伝染性紅斑

2019年の年間報告数は666件と、前年(200件)から大きく増加し、2015～2016年以来3年ぶりの流行である。報告数では2011年以来の高値となった。

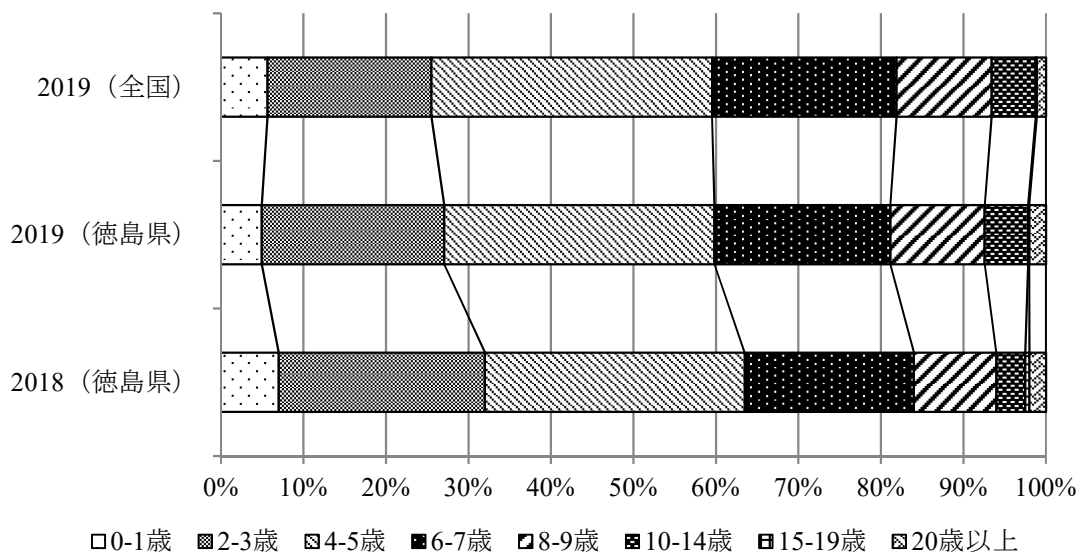
本疾患は、年始頃より7月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年は第20週から増加し、ピーク(第36週 1.78件/定点)を示し、その後増減を繰り返しながら第51週まで全国平均を上回った状態であった。

年齢層別報告数では、0～1歳 5.11%、2～3歳 22.52%、4～5歳 32.43%、6～7歳 21.47%、8～9歳 11.11%、10歳以上 7.36%と、2～7歳の報告が全体の約76%を占めた。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



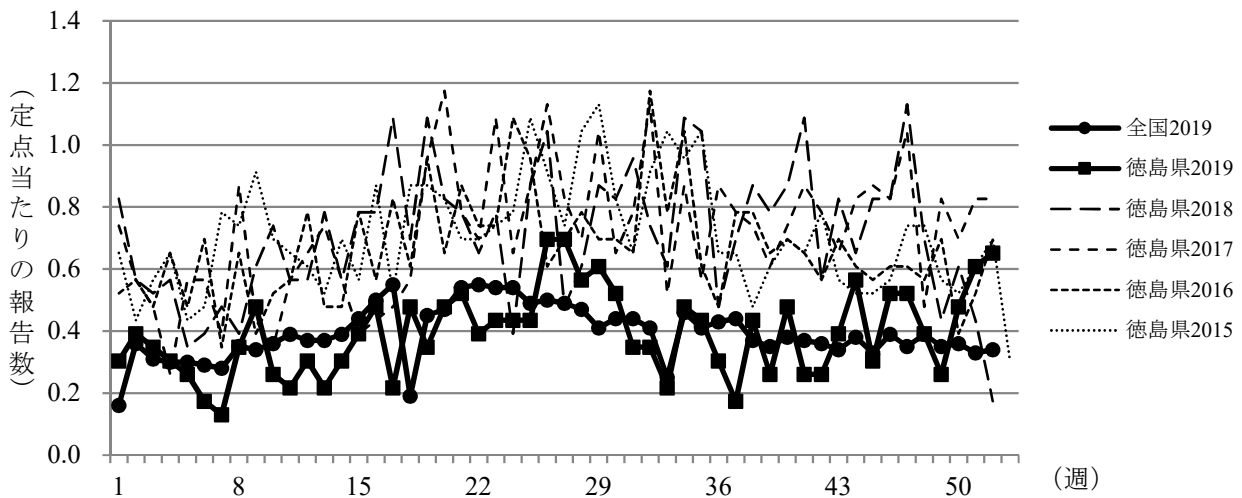
⑨ 突発性発しん

2019年の年間報告数は470件であり、前年(848件)から大きく減少した。

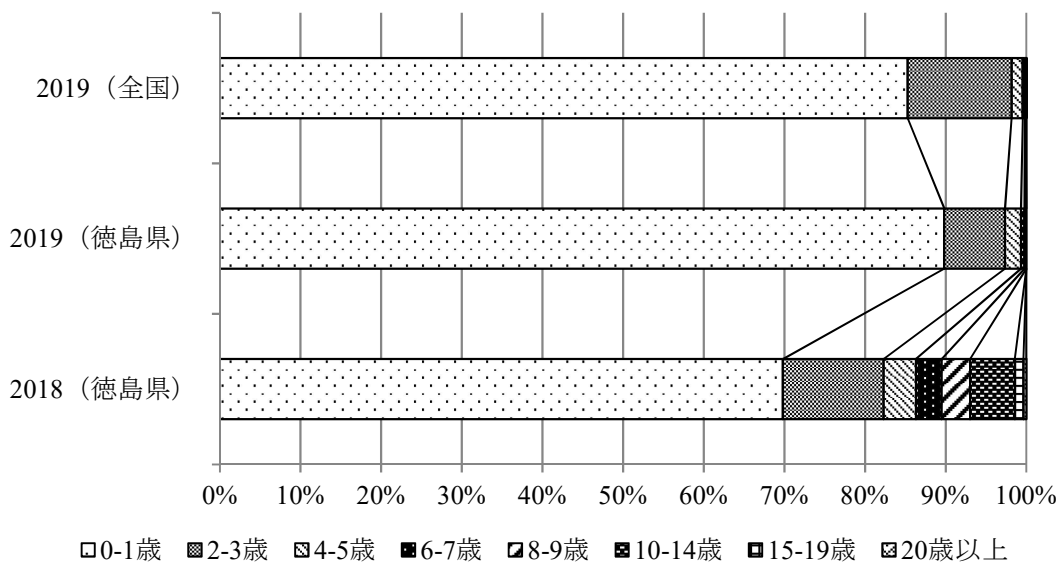
本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.13~0.70件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では6か月~1歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。本年も0~1歳89.79%、2~3歳7.66%、4~5歳1.91%、6歳以上0.64%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約97%)を占めた。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数



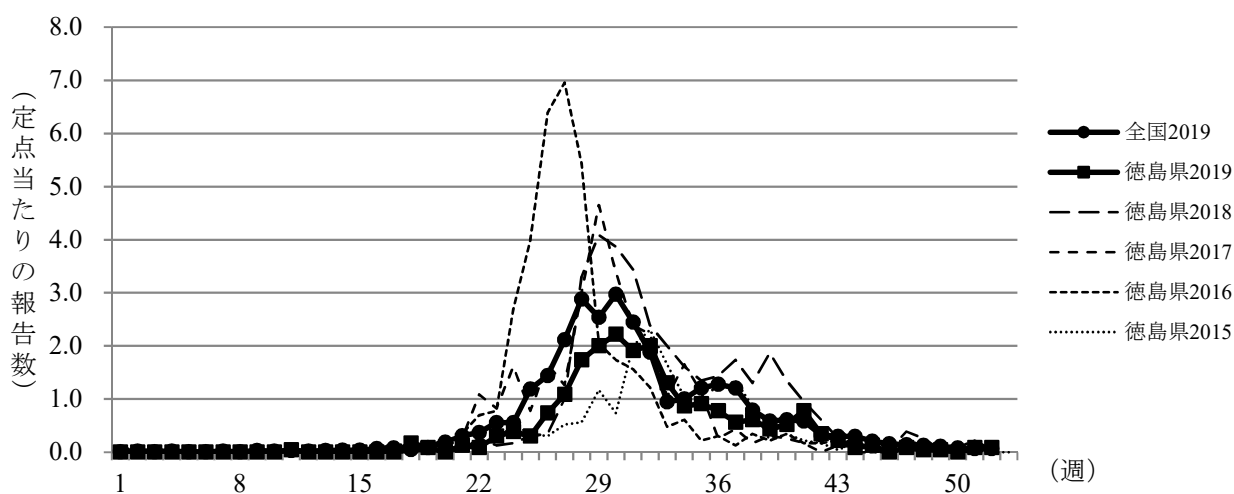
⑩ ヘルパンギーナ

2019年の年間報告数は486件と、前年(817件)から大きく減少した。過去5年間の報告数の推移では、428~876件と、流行の大きかった年と小さかった年では約2倍以上報告数の差が見られる。

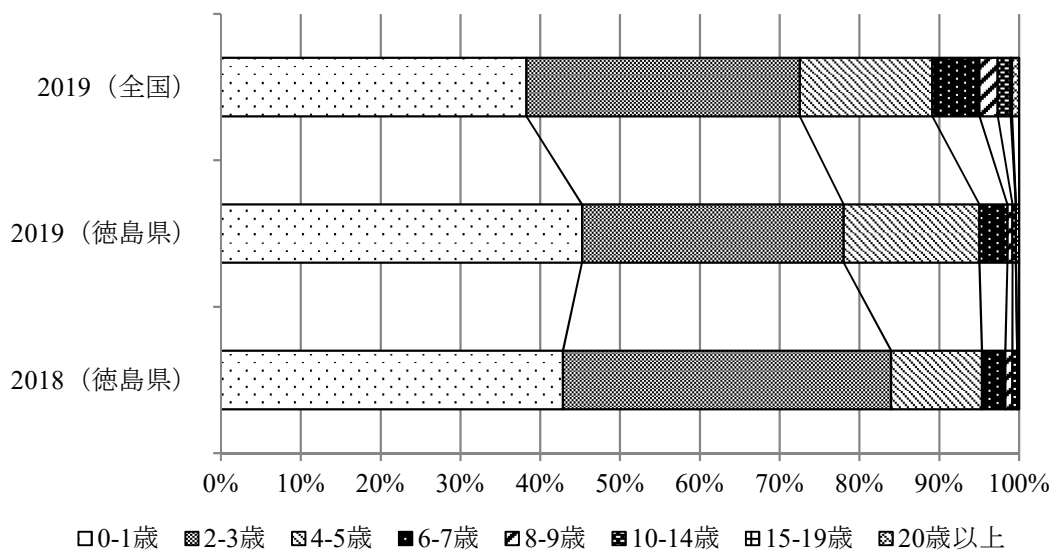
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、6月下旬(第26週頃)より報告数が増加しはじめたものの、増加は緩やかであり、前年より約1週間遅くピーク(第30週2.22件/定点)を示した。

年齢層別報告数では、5歳以下が大半を占め、1歳代が最も多いといわれている。本年も、0~1歳45.27%、2~3歳32.92%、4~5歳16.87%、6~7歳3.50%、8歳以上1.44%であり、5歳以下の乳幼児が約95%を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数



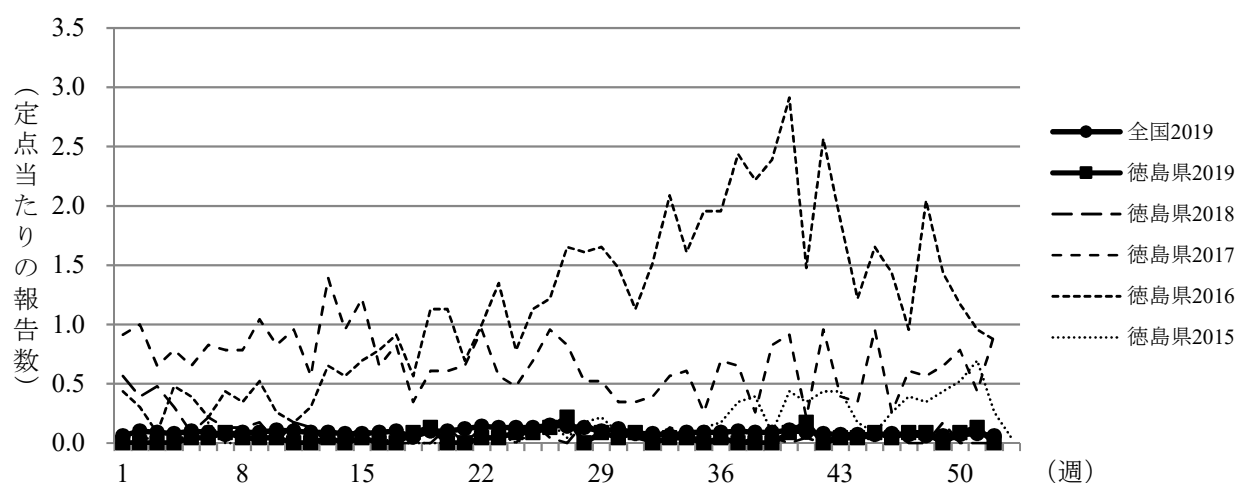
⑪ 流行性耳下腺炎

2019年の年間報告数は56件と、前年(110件)から減少した。過去10年間では2010～2011年、2016～2017年と、数年おきに大きな流行が見られている。

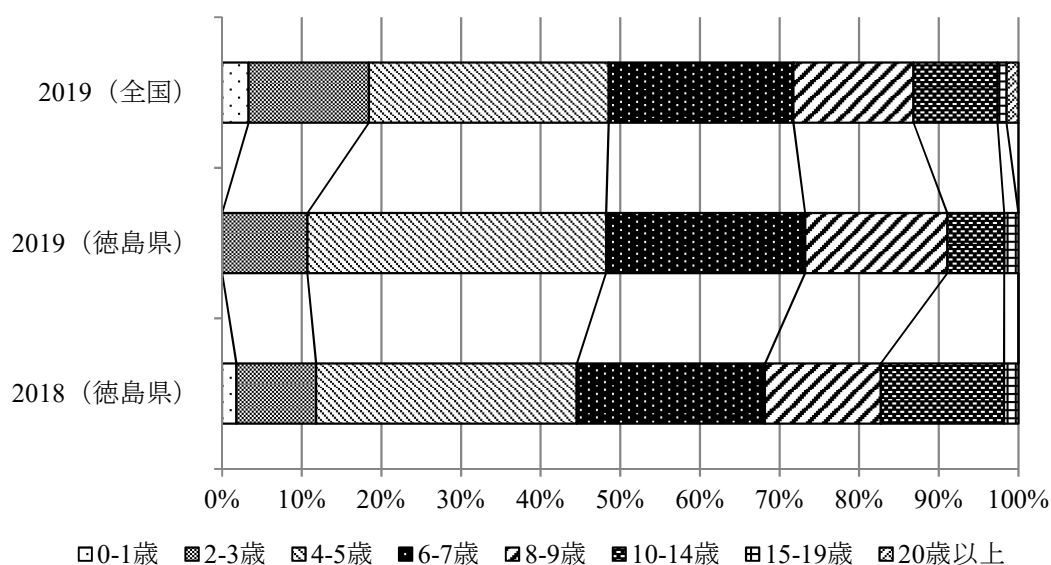
本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる。また、3～4年ごとの周期で流行を繰り返すが、本年は流行が見られず年間を通して低値で推移した。

年齢層別報告数では、0歳から4歳まで年齢を重ねるとともに増加し、5歳以降は年齢とともに減少するとされている。本年も、0～1歳0%、2～3歳10.71%、4～5歳37.50%、6～7歳25.00%、8～9歳17.86%、10歳以上8.93%であり、4～7歳の幼児からの報告数が約63%を占めた。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



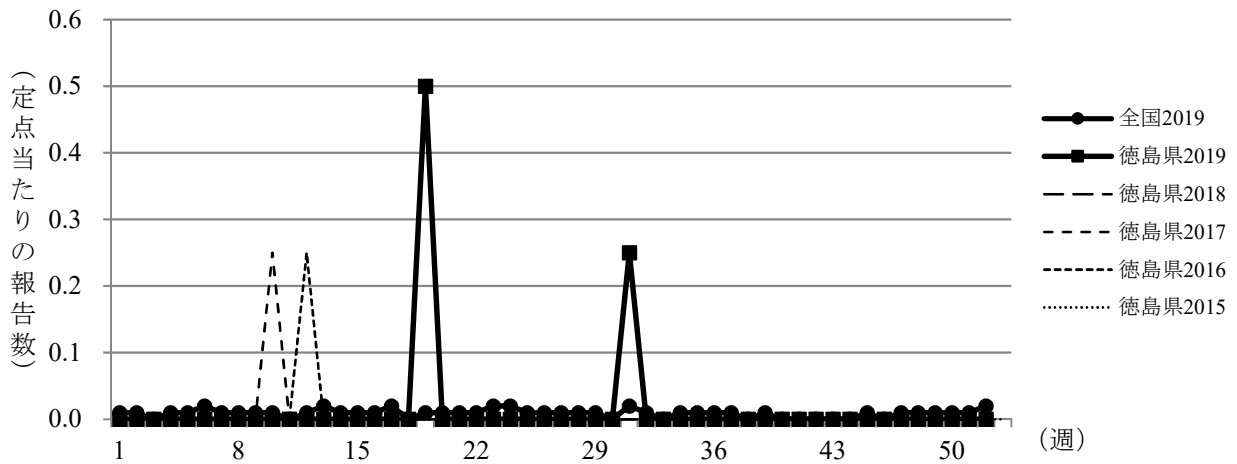
流行性耳下腺炎の年齢層別報告数



⑫ 急性出血性結膜炎

2019年の年間報告数は3件と、前年(0件)から増加した。本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされる。毎年0~1件で推移していたが、過去5年間では最も多い報告数であった。徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

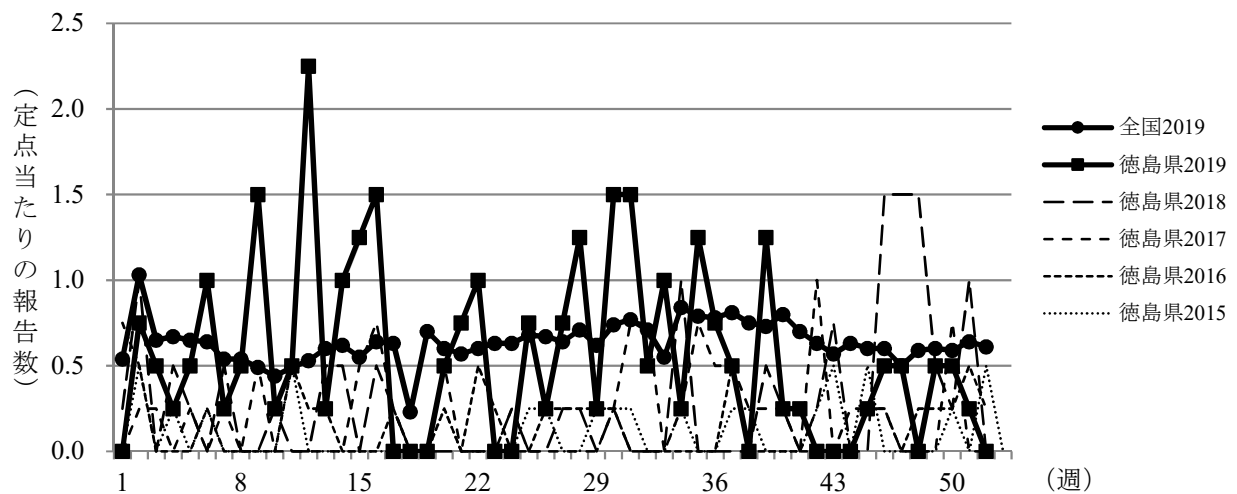


⑬ 流行性角結膜炎

2019年の年間報告数は117件と前年(58件)から増加し、過去5年間では最も多い報告数となった。全国では過去5年間の年間報告数は横ばいで推移しているのに対し、県内では年々増加傾向にある。

年齢層別報告数では、10歳未満 25.64%、10歳代 6.83%、20歳代 8.55%、30歳代 23.08%、40歳代 17.95%、50歳代 5.13%、60歳代以上 12.82%と幅広い年齢層から報告された。

流行性角結膜炎の週別患者報告状況

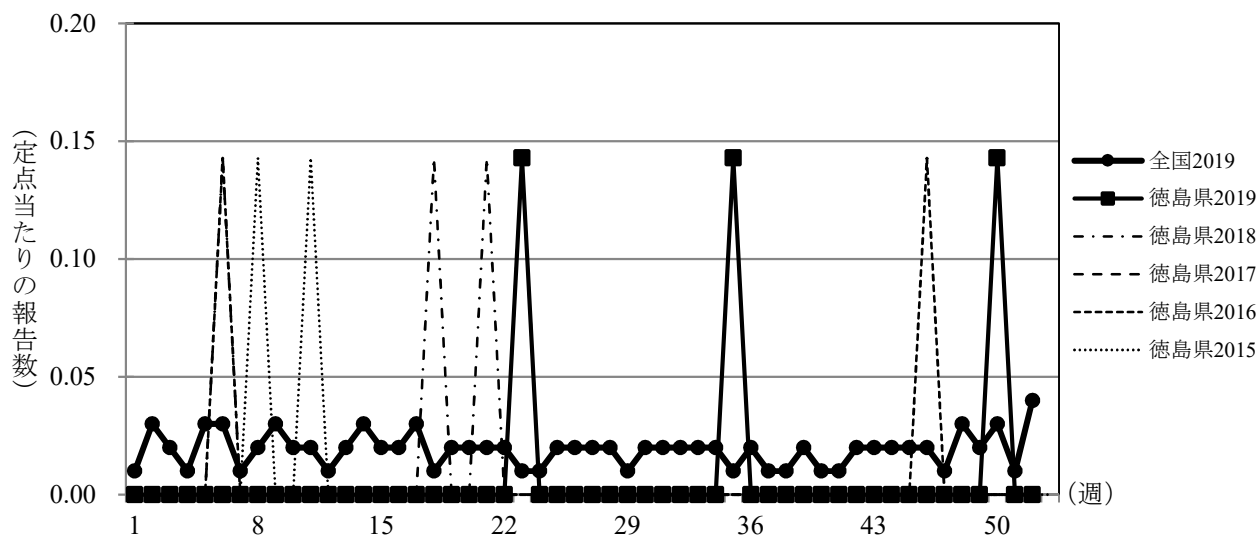


⑭ 細菌性髄膜炎（髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く）

2019年の年間報告数は3件（0～60歳代）と、前年（4件）とほぼ横ばいであった。過去5年間では、毎年0～4件で推移している。

病原体は、マイコプラズマ1件と化膿性レンサ球菌1件が検出されている。

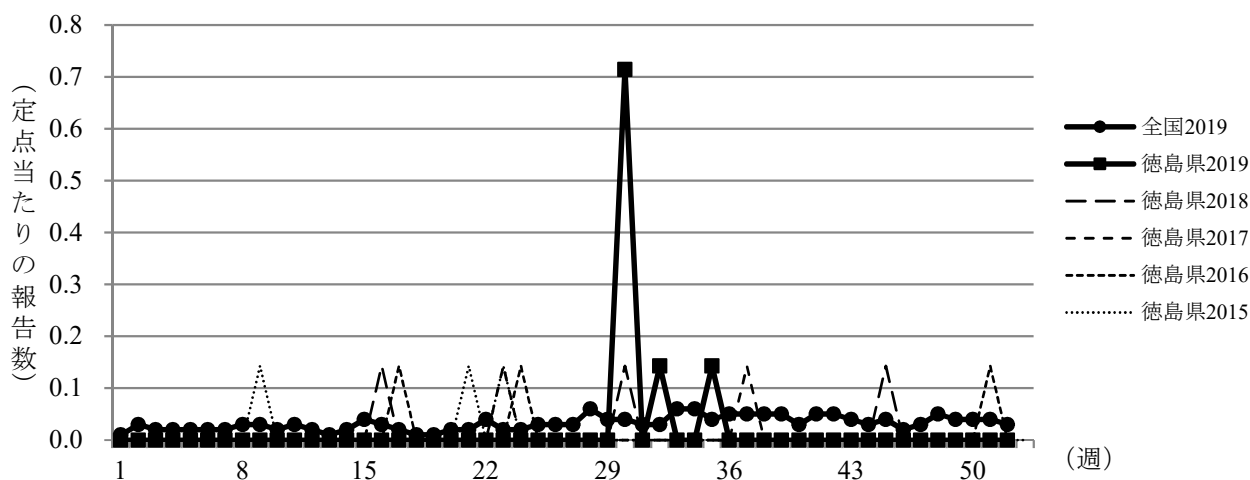
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑮ 無菌性髄膜炎

2019年の年間報告数は7件（0歳～40歳代）と、前年（3件）から増加した。過去5年間では毎年2～3件で推移している。病原体は、1件からEBウイルスが検出されている。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況



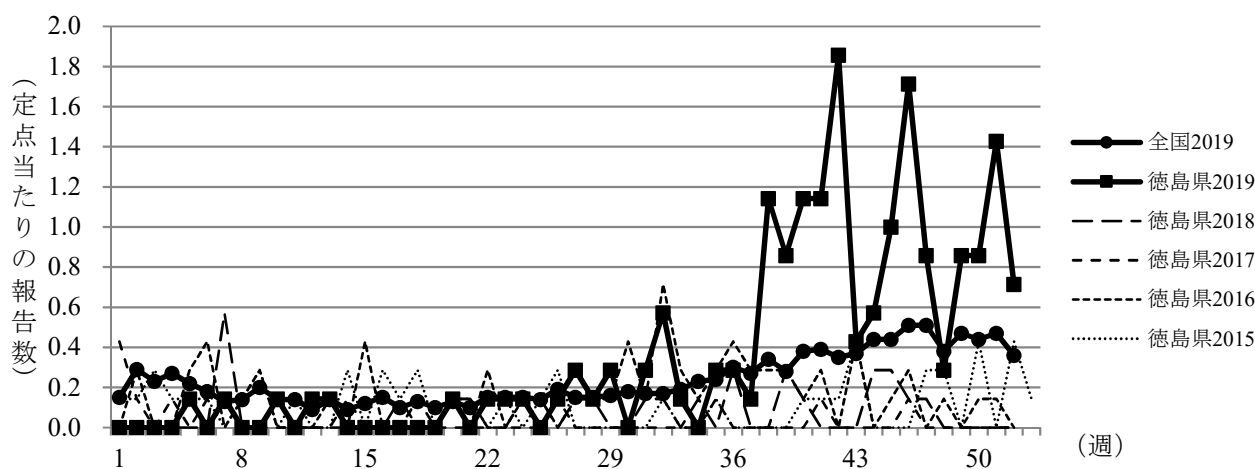
⑩ マイコプラズマ肺炎

2019年の年間報告数は131件と、前年（26件）から大幅に増加した。毎年13～57件で推移していたが、過去5年間では最も多い報告数であった。

本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけてやや多くなるとされる。本年も第38週以降、県内の一部地域での地域流行等により急増し、全国平均を上回る報告数のまま越年した。年間を通して0～1.86件/定点で推移した。

年齢層別報告数では、幼児から成人まで報告されるが、学童期、青年期に多いとされる。5歳未満34.35%、5～9歳38.17%、10歳代20.61%、20歳代以上6.87%と幅広い年齢層から報告された。学童期を含む10歳未満からの報告数（約73%）が他の年齢層に比べ多かった。

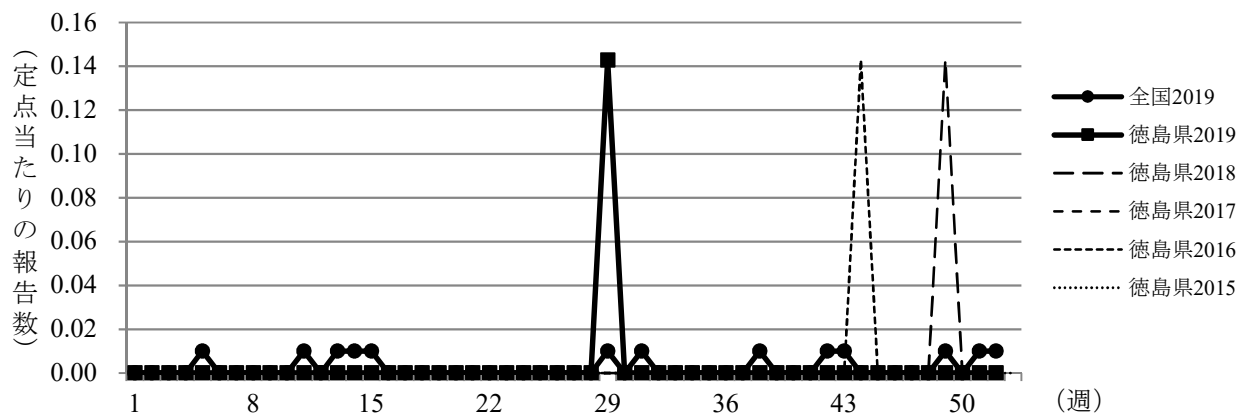
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑰ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

2019年の年間報告数は1件（80歳代）であった。過去5年間では、毎年0～1件で推移している。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑱ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

2019年の年間報告数は8件（10歳未満）と、前年（2件）から増加した。過去5年間では、2016年が58件と最も多かった。例年、年当初から春先にかけて多く報告され、夏季は減少するなど、季節的な特徴も見られたが、本年は春季と秋季に報告が続いたものの、0～0.29件／定点の低値で推移した。

年齢層別報告数は、5歳未満4件、5～9歳4件であった。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

